

4 3 2 1

1〜3
コミュニケーション・ディベートの様子
4

左中央:能見太一郎教諭
右手前:佐久間教諭
参加した生徒、卒業生と



日出学園中学校・高等学校



21世紀型の 学びを体現する コミュニケーション・ ディベート

日出学園では、生徒と教員、卒業生、外部の人などを交えた独自の講座「コミュニケーション・ディベート」を月1回程度実施している。今回はライフイズテック株式会社の取締役・讚井康智氏をアドバイザーに迎えて開催された。コミュニケーション・ディベートとはどのような講座なのか。立ち上げた数学科の佐久間教諭と社会科の能見太一郎教諭、今回、参加した生徒と卒業生に話を聞いた。

毎回テーマを設定し、コミュニケーションを通じて、それぞれの意識を深めていく。毎回10〜15人が参加し、テーマは参加者が考えたいテーマを選ぶ。今回は佐久間教諭が選んだ「ポストシンギュラリティ（技術特異

点）」についてだ。情報・科学技術が飛躍的な進歩を遂げた現代、その一端を担っているのが人工知能（AI）だ。2045年にはAIの能力が人間を上回るシンギュラリティを迎えるとの予測もある。その時、現在ある仕事の多くをAIが行うようになり、世界の有り様が大きく変わる。

今回のコミュニケーション・ディベートでは、シンギュラリティや技術の進歩についてのイメージを明らかにし、今の学び・教育がどう変化していくのか話し合った。多数の人が「AIに人間が支配されるようになる」など、マイナスイメージを持っている。また、具体的に何が消え、何が残るのかという問いについては、「人によって感じ方が異なるものや、原始的なものは残る」「先生はい

参加者は話が上手な生徒ばかりではない。むしろ苦意思識を持っている生徒も多いという。参加者の中には、ほとんど発言しないで他の人の話を聞いている生徒もいる。発言が少なかった人でも、講座後の感想文で、自分の想いを表現する生徒もいるという。講座に参加した卒業生が言う。「最初は、自分の考えをアウトプットするのが苦手でしたが、

なくなるかもしれないが、先生の個性が表われているような授業は残るかもしれない」などの意見があった。コミュニケーション・ディベートでは、「一般的なディベートのように相手を打ち負かしていくような議論は見られない。能見教諭が言う。「コミュニケーション・ディベートはディベートのテクニックを身につける場ではなく、議論を積み重ねて相手の話に共感することに重きを置いています。議論と会話の間で、コミュニケーションしていくイメージです。そのため、勝敗や結論を出すなどのゴールを定めていません」

他人の意見を聞くことで自分の意見が深まり、まとまってくる。発言するときは、自分の考えを客観的に知ることもつながります。ここでの経験が、大学のESSサークルでの英語のディスカッションに生かされています」

「合宿で、小論文やレポートの書き方につながる実践的な勉強ができたと思う」と卒業生。作文は大学などのコンクールや新聞に投稿。コンクールなどで受賞する生徒もいると言う。コミュニケーション・ディベート以外の機会でも、日出学園には気軽に学校を訪れる卒業生が多い。生徒の一人が言う。「日出学園にはにぎやかな人も、おとなしい人もいますが、みんなが居心地のよさを感じられる学校だと思っています」

居心地の良さが一番なのが職員室だという。職員室には教員に質問したり、雑談できるコーナーがある。アットホームな雰囲気、担任の先生でなくても質問しやすい環境だ。佐久間教諭が言う。「本校は少人数の私塾的な学校から始まり、80年以上が経ちました。創始者の思いを受け継ぎ、少人数だからこそ生徒全員の顔が見えるアットホームな教育を実現しています。それが日出学園全体の「ファミリー感」に表われています」

Life is Techでは、中高生向けのITプログラミングを学ぶキャンプやスクールを運営しています。イベントを通して子どもたちのやる気を引き出し、アプリやゲーム、アニメーション、映像などのオリジナル作品づくりをサポートしています。これまでの学校教育は、何年生はここまで、というように制限されたカリキュラムが中心でした。しかし、学ぶという疑問が出てきますし、それを深めるとまた新しい課題が生まれていきます。子どものやる気を損なわずに能力を伸ばしていくためには、制限された学びではなく、「青天井」の学びが必要です。それが学校の文化を形づくっているように感じました。



ライフイズテック株式会社 取締役 讚井 康智さん

日出学園中学校・高等学校

〒272-0824 千葉県市川市菅野3-23-1
TEL 047-324-0071
<http://high.hinode.ed.jp/>